星の岬

大森光章

叢文社

星の岬

大森光章

叢文社

星の岬
一九八二年二月二十日　第一刷印刷
一九八二年二月二十五日　第一刷発行
著者／大森光章
発行者／伊藤太文
発行所／叢文社　東京都千代田区猿楽町一ノ四ノ五　久松ビル内
郵便番号一〇一／電話〇三・二九五・〇一五九
印刷所／第一印刷所・綜合企画印刷
製本所／小高製本工業
定価／一二〇〇円
©1982 *Mitsuaki Oomori Printed and bound in Japan*
4224 ISBN 4-7947-0044-X C 0093 ¥1200 E
著者との諒解により検印は廃止します
乱丁・落丁の本は小社でお取り替えいたします

星の岬

大森光章

叢文社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

5 凍土抄
7 安産
27 空襲
45 霧鐘
＊
61 王国
＊
141 星の岬
＊
261 あとがき

凍土抄

安産

汽車が止まると乗客たちがひとり残らず下車してしまった。寒寒とした材木くさい駅であった。駅員に訊いてみると、そこが終着駅で、あとは上りがひと列車あるだけ、下りは翌朝までないという話だった。わたしは下りで、もっと先の鉱山町までゆく予定だったから、行先をよく確めないで乗っていたわけだが、急ぐ旅でもなかったので旅館に一泊することにした。ところが、その旅館が一軒もなかったのである。途方に暮れているわたしをみて、駅員は、二里ほど先の村落に木賃宿があるからそこへいって泊めてもらったらどうかといい、そこへゆく道順を教えてくれた。わたしは礼をいって駅をでた。まだ夜ふけというほどでもなかったが、どこの家も戸口をとざし、枯葉を燃やしている煤煙のにおいが薄暗く淋しい町並に漂っていた。はっきりとは見えないが、ところどころの空地には、原始林から伐りだされたままの木材が、荒い岩礁のように累累と積みあげられている。そんな町並を通って十分ほどゆくと、人家の灯もしだいに遠く疎らになり、やがてわたしは深い暗黒の世界に閉じこめられていた。

月はなかった。たぶん、空にはまだ冬の名残りをとどめた陰雲が低く垂れ込めていたのだろう。星ひとつ見えなかったような気がする。初めは気がつかなかったが、何処からともなく、絶えず溪流の音がきこえていた。それが道路の右側か左側かよくわからない。あたりは一歩先になにがあるかもわからない闇である。ときどき霧の感触に似た冷気が頸筋を掠めていった。

わたしの両眼は完全にその機能を失っていた。なんども自分が失明してしまったような不安や焦躁感に襲われ、そのたびに駅に引き返して待合室にでも泊めてもらおうかと思案した。が、なぜか知らないが、わたしはそうしなかった。あるいはそれは、過去何年間かの軍隊生活に於いてわたしの心身のなかに培われた順応性や投機的な気質のせいだったかも知れないが、とにかく、わたしはその無限に奥深い暗闇の被膜を手探りで掻き分けながら、軍靴を引き摺って前へ前へと盲滅法に歩いた。

いつか溪流の音が遠ざかり、地面から朽葉のにおいが漂ってきた。道はどこか林のなかの緩やかな斜面に差し掛かっているようだった。わたしはいくどか立ち止まり、暗い空に向って眼を見張った。そうすることの無意味をわかりながらも、皮膚が微かな夜の気配の変化を感じとるたびに、なぜかそうしないではいられなかったのだ。寒さが身にしみた。それはかつて軍隊で体験した寒さに比べると、堪え難いというほどの寒さではなかったが、頸のあたりを掠めてゆく冷気は、異様な感触で身にしみた。わたしは着ている軍服の襟をたて、ときどき石に躓い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たり、道ばたの枯草に足を捕られたりしながら、泳ぐように歩きつづけた。

とつぜん汽車の音がして、三輛ほど連結した客車の窓の灯火が、右側の林間を低く通過していった。上りの終列車であろう。闇のなかに断続的に木立の影を浮かびあがらせながら走ってゆくのが、意外に近く見えた。わたしはそれが林の向うの暗闇に消えてゆくのを見送った。あたりは、またもとの闇と静寂に返った。そのとき行手に、焚火とも人家の灯とも知れない黄色い明りを発見したのである。たったいま通過していった汽車が、窓をひとつ置き忘れていったのではないかと思った。わたしは眼を見張り、気を配りながらその明りに向って近寄っていった。道路より少し下った林のなかに人家が一軒あって、窓に灯がともっていた。窓ガラスを透してランプが見え、その光線が、わずかに木立の間を突き抜けてわたしの脚下まで届いていた。そのあるかなしかの明るみをたよりに、わたしはその家に辿り着くための道を探しあて、脚下に気をつけながら木立の間を抜けていった。靴の下でボキボキと枯枝の折れる鈍い音がした。

戸口に立って声をかけると、少したって家のなかから、しわがれた女の誰何する声が跳ね返ってきた。わたしが、旅のものだと答えると、部屋の板戸を開く音がして、土間に差し込んだランプの薄明りのなかに、もんぺをはいた老婆が姿を現わした。老婆は草履をつっかけて戸口にやってくると、ガラス戸ごしにじっとわたしの方を窺っていたが、なにかひとりごとを呟き

ながらガラス戸を開けた。事情をのべ、馬小屋でもいいからひと晩泊めてもらえないだろうかとわたしは頼んだ。

「戦地からかえってきたのかね？」

と老婆はいった。よくは見えなかったが、その皺だらけの顔には理解しがたい感情の翳が浮かんでいた。

「ええ」

わたしは曖昧に答えた。

「どっちの方にいってたんだね？　外地にはいかなかったかね？」

「三年ほど千島にいたけど、終戦になる前に本土に撤退してきたんですよ」

「運がよかったんだな、お前さんは」

「どなたか兵隊にいっているんですか」

老婆はうなずいて鼻水をすすった。

「運が悪かったんだよ。ふたりいって、ふたりとも死んでしまった……」

どこで戦死したのか訊こうとして、わたしは言葉に詰った。訊いてみたところで無意味のように思えたからである。

老婆はそれ以上詳しいことはいわず、そのまま奥にひっこんで、しばらく家族のものと相談

しているようだったが、やがて戻ってくると、悪いけれどよそへいって泊めてもらってほしいと告げた。

「病人がいるもんでな」

と老婆は気の毒そうに言訳をした。その顔には、ほんとうに同情に堪えないといった苦渋の色が浮かんでいた。

「悪く思わないでおくれ」と老婆は悲しそうな口調でいった。「病人がいやがっているもんだでな」

「とんでもない」とわたしは微笑を浮かべながらいった。「こちらこそ、とんだお邪魔をしました」

わたしが歩きはじめると、うしろで老婆が「気をつけてゆきなされよ」といった。もとの道路にでて振り返ると、なにも見えるはずがないのに、老婆はまだ戸口に立ってこちらを見ていた。

わたしは再びうなだれて歩きはじめた。周囲の状況はすべて浪費した何分間かの前と同じだった。深い闇にとざされ、道路は歩きにくく、そして寒さが身にしみた。

さらにどれくらいかの時間が経過した。わたしの心は空しく、肉体までが一種の休眠の感覚に落ち込んでゆくようだった。そのなかで一ヵ所だけ、闇にむかって凝然と覚醒し、精巧な計

器の針先のように震えている部分があった。それがどこであるのか、耳か鼻のようでもあり、疲労した後頭部のようでもあり、遠い記憶を探し当てようとする意識のようでもあったが、それは私にも確めようがなかった。それが機能を失っている眼だということを意識したのは、それからしばらくして、行手にもういちど人家の灯を発見したときである。いや、正確にいうと、最初に発見したのは灯火ではない。闇のなかでちろちろと焔をあげている焚火であった。当然のことかも知れないが、一歩先になにがあるかもわからない暗黒のなかで眼を開いていることは無気味だったから、わたしはその焚火を発見するまで、自分が眼を開いていることに気付かなかったのである。

わたしはオレンジ色に燃えている焚火にむかって道をたどった。運よく、焚火はしだいにわたしに近付き、やがてわたしは、その焚火のむこうに点っているいくつかの窓明りを認めた。

しかし、焚火だとばかり思っていたその火は、実際は屋外に設けられたカマドの焔だった。かなり構えの大きな農家らしく、窓のいくつもある二階建ての母屋にならんで、独立した家畜小屋やコンクリート造りのサイロが、母屋から洩れるガス灯の光に側面から照らされている。異様な雰囲気が漲っていた。母屋の明るさも異様だったし、玄関や台所にちらつく人影の気配もふつうとは感じられなかった。家畜小屋にも灯が点っていて、馬がはめ板を蹴っている音や、間延びした牛の鳴声がきこえていた。そこにもだれかがいるらしく、かすかに断草機や水

の音もきこえてくる。わたしはカマドの傍にひとりの男がいるのに気付いた。ときどき、焚口からふきだす焔が男の顔を赤く照らした。不気味に頬の痩せこけた三十歳ぐらいの男で、わたしと同様に襟章のない軍服を着込んでいた。かれはカマドの前に腰を下ろし、両手で膝を抱えながら、放心したように火を見詰めていた。わたしはその男の傍へ真っ真ぐに近よっていった。わらびか大根でも煮しめているような匂いが漂ってきた。男は蜥蜴のような顔をあげ、大きな眼を剝いてわたしの方を窺った。

「こんばんは」

とわたしは声をかけた。

「こんばんわ」

とかれが答えた。顔に似合わない柔か味のある声だった。が、かれはやはり地面に腰を下ろしたままだった。

木賃宿のある部落までまだ遠いだろうか、とわたしは訊ねた。

「お通夜にきたんじゃないのかね?」

男は怪訝そうな顔をした。

「ああ、それで……」

わたしは異様な雰囲気の漲っている母屋の方に眼をやりながらいった。そういわれてみる

と、煮しめの匂いにまじって微かに線香のにおいが流れてくるような気がする。わたしは事情を説明したが、泊めてくれとは頼まなかった。事実、そうは思っていなかったし、例え頼んでみたところで、葬式では話にならないだろう。闇のなかに火が見えたので道を確認したくて立ちよったのだ、とわたしがいうと、闇のなかをひとりで歩くのは気持のいいものではない、人間は真の暗闇のなかでは自殺もできないものだ、といって男は真面目にうなずいた。

「長いことひっぱられていたのかい？」

とかれは訊ねた。

「たいしたこともないけど、四年とちょっと」わたしが答えた。「そのうち千島に三年ほどいましたよ」

「千島にねえ？」

「あんたもあっちの方に？」

「いや、おれは南の方だったよ」

「南というと、どちらですか」

「あっちこっち移動したけど、さいごはレイテだった。ジャングルのなかをふた月以上逃げまわってね。それで、こんなざまさ……」

男はほとんど骨と皮ばかりの手で、とんがった顔をしごくような動作をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.